

「森の中の死」論

— 老婆の生と死の伝えるもの —

佐久間 由 夢

On Sherwood Anderson's "Death in the Woods"
— The Significance of the Life and Death of an Old Woman —
Yoshikazu SAKUMA

Out of me unworthy and unknown
The vibrations of deathless music:
"With malice toward none, with charity for all."
— Edgar Lee Masters

1. はじめに

Sherwood Anderson が1925年に出版した *Dark Laughter* は、彼の唯一のベストセラーであった。それは財政的にも大きな成功であった。しかし、Ernest Hemingwayは、即座に1926年に *The Torrents of Spring* を出版して、Gertrude Stein とAndersonを揶揄した。さらに、27年には *New Republic* 誌が、*Winesburg, Ohio* の著者としての Anderson は今や滅びようとしている、との記事を載せた。彼は、すぐさま、友人 Burton Emmett に宛てた手紙で、' Well, let him die. The question that interests me is as to whether there is another Sherwood Anderson coming slowly to life.'⁽¹⁾と自らの意気込みを伝えている。そうした中で、1933年、*Death in the Woods and Other Stories* として出版された短編集の巻頭を飾るのが、"Death in the Woods"である。完成までに何回となく書き換えられた。それを裏付ける習作的草稿やメモが残っている。⁽²⁾ 本論でもそのいくつかに触れることになる。

この短編集には16編の短編小説が収録されている。その多くが、*Dial*をはじめ、*Scribner's Magazine*, *American Mercury*, *Vanity Fair* 等の雑誌に既に発表されたものであるが、"Brother Death"(1933)のように新たに書き加えられたものもある。

ここでは、表題の作品について、ヒロインの老婆の生涯を通して、その意味と意義をさぐり、最後に、*Death in the Woods and Other Stories* の巻末を飾る作品"Brother Death"を概観し、本作品との関連を述べたい。

1

はじめに作品のあらすじを紹介しておく。物語は、冬のある日の午後、老婆が犬をつれ、少しばかりの卵をもって、salts, pork, beans, sugar, flour など必需品の交換に、ひどい雪の中を歩いて町へやって来るところから始まる。老婆は用事を済ますと、さっさと帰って行く。親しく語りかける人もなければ、彼女の荷がどんなに重くても、馬車に乗せてくれる人もいない。

彼女は町から4マイル離れた小さな家に、夫と息子と三人で暮らしている。息子は21歳の若さで既に投獄されたことがある、したたか者である。夫の Jake Grimes は馬泥棒の評判で、町の誰からも相手にされない。一家は、Jake の父の代に製材所を興し、財を成すが、酒と女で身を持ち崩し、僅かに残った財産も息子の Jake がすべて浪費してしまった。そんな Jake のもとにどうして彼女は嫁いだのであろうか。

Jake があるドイツ人の農家へ出稼ぎに行き、そこで年季奉公をしていた、当時は若い娘だったこの老婆を知ることになる。彼女とのデイトを巡り、主人である農夫と大喧嘩になる。二人の結婚も、いわば喧嘩の行きがかり上でしかなかった。— 'He wouldn't have married her if the German farmer hadn't tried to tell him where to get off.'⁽³⁾

彼女は、私生児でその上、母親に置き去りにされた孤児であった。身寄りもなく、このドイツ人農家に奉公していた。幼くして下女として働くが、年頃の娘時代を迎えると、主の農夫に眼を付けられ、性的迫害の脅威にさらされる。又、これに感づいた細君からはいびられる。夫婦して野良仕事に専念し、食事の支度から、牛、豚、馬、鶏など家畜の世話まで、主婦の仕事を含めてすべてがこの下女の肩に掛かっていた。二人には子供もなく、勤労と蓄財に余念の無い夫婦であった。子供のない夫婦は人間関係の不毛さや円満を欠く夫婦の象徴としてよく用いられる。この農夫が夫婦生活の不満のはけ口の対象に、彼女を選んだともとれよう。実際、いくつか現存する習作原稿の一つとされる "Father Abraham: A Lincoln Fragment" では、夫は妻の不妊に不満を抱き、それを根拠に maid との性的関係を持つことを正当化しようとしている。⁽⁴⁾ そうであれば、まさにあらゆる生物的な飢餓を癒す事が、彼女の仕事であり運命であった事になる。

結婚後、娘も生まれるが、早く死なれて、結局、女性としての役割や働きを彼女一人が担うことになる。夫と息子、犬や豚、牛、雌鶏、馬たちまで、全ての動物たちを養うのが彼女の仕事となる。

信用のない Jake は仕事にも失敗する。息子が長じると、父子で酒にふける。ときに食物をめぐる彼女に暴力をふるう。そんなとき、彼女は食用に鶏を殺さなくてはならなくなる。

How was she going to get everything fed? — that was her problem. The dogs had to be fed. There wasn't enough hay in the barn for the horses and the cow. If she didn't feed the chickens how could they lay eggs? Without eggs to sell how could she get things in town, things she had to have to keep the life of the farm going?⁽⁵⁾

ここに、彼女の生活の一端が見られる。金も頼れる知人もない彼女にとって卵のみが頼みの綱である。鶏がいなくなったらは大変である。

その雪の日は、予想以上にいろいろな品が手に入り、最後に肉屋を出るとき、主人が初めて親しげな声をかけてくれた。店を出ると、近道を取って家路を急ぐ。街道を外れ、柵を越えて雪の野原を横切って、森の中へと小道をたどる。山の頂上を越えると空き地があり、一本の木がそびえ立っている。病み上がりの老婆は、あまりの疲労に、背負ってきた荷物をその木の幹にもたせて、一休みすべく腰を下ろすと、眼を閉じた。しばらくの間老婆は寝入ってしまう。

その間、彼女の連れていた犬たちは、野ウサギを追って、空腹をいやし、他の農場の犬たちを連れて戻ってくる。やがて月がでる。犬たちは老婆の前の空き地に円をかくて走り始める。

Round and round they ran, each dog's nose at the tail of the next dog. In the clearing, under the snow-laden trees and under the wintry moon they made a strange picture, running thus silently, in a circle their running had beaten in the soft snow. The dog made no sound. They ran around and around in the circle.⁽⁶⁾

犬たちの不思議な円環運動は、静寂に包まれた月夜の森をいっそう神秘的なものにする。円環には終わりも始まりもない。始めが終わりであり、終わりが始めである。果てしなく続く永遠のイメージが喚起される。同時に、それは時間の停止を感じさせる。

一匹の犬が環を離れて、老婆のもとへやって来て顔に鼻を突きつけ、老婆の生を確認すると、安心して又環に戻り走り続ける。全ての犬が順に彼女の所へやって来ては環にもどる。彼女は、朦朧とする意識の中で、犬たちのこの不思議な振る舞いを眺めつつ息を引き取る。すると犬たちは一斉に走るのをやめた。これによって、永遠の時間に一つの区切りがもたらされた。逆説的な表現であるが、就縛された時間から日常の時間への復帰である。一瞬の静寂の後、犬たちは彼女の周りに集まった。

この円環運動を作者の言うように犬たちによる老婆の葬儀(a kind of death ceremony)とみれば、犬たちの円環運動の停止は、老婆の葬儀の終了の宣言と解釈出来る。老婆を彼岸の世界へ送ってしまえば、もはや、老婆は老婆ではなくなる。葬儀の終了と共に、犬たちの養い親としての老婆の存在は消滅した事になる。

果たして、しばらくすると、一匹の犬が老婆の背の荷物をくわえて、振り回すと、他の犬たちもそれぞれ荷袋に歯を立てた。老婆の身体は空き地に引きずり出され、着古した衣類は肩から裂ける。そこに有るのは犬と食物の入った荷包みだけである。もはや老婆は存在しない。犬たちは思わぬ餌にありつけ大満足であった。彼女は死後も生き物に餌を与え続けたことになる。

老婆の遺体は一両日経って無傷のまま発見された。着物は肩から腰まで裂けていたが、その裸体は色白の若い少女のような不思議な美しさを湛え、見る人に神秘的な感動を与えた。

Her body was frozen stiff when it was found, and the shoulders were so narrow and the body so slight that in death it looked like the body of some charming young girl.⁽⁷⁾

老婆から少女の姿へのこの変貌は再生・復活をイメージさせる。

2

少女への変貌が、再生・復活を示すとしたならば、その仕掛け人は、老婆の衣服を引き裂いた犬たちである。彼らによって、彼女の裸体が曝され、少女のような不思議な美しさを呈することになったのである。

犬は古くから忠実の印とみなされた。中世に、墓碑などでよく女性の足下にその姿が刻まれたのは、その為である。又、死者が、太母と復活の象徴とされる夜の海を渡るとき、犬は死者のお供となり、あるいは死者の魂を導く導師になるといわれた。⁽⁸⁾ そうしてみると、あの死の儀式の犬たちは、老婆を黄泉の国へ導く役割として、まさに相応しい存在であったと言える。

ところで、これまで知られている習作原稿やメモでは、何れも犬の頭数への言及がない。なぜか、本作品にだけは、頭数が明確に書かれている。そこに何か作者の意図が感じられる。

There were four Grimes dogs that had followed Mrs. Grimes into town, all tall gaunt

fellows....They had been chasing rabbits in the woods and in adjoining fields and in their ranging had picked up three other farm dogs.⁹⁹

老婆の死の儀式には、彼女の四匹の犬と、近隣の三匹の犬が加わった事になる。

ここで数字の持つ象徴的意味を見ておきたい。四は、東西南北の四方角、あるいは地・水・火・風(earth, water, fire, air)の四大元素を示すことから、大地や世界を象徴するとされている。¹⁰⁰ また、一年は四つの季節にわけられていて、冬によって終わる一年の終わりは、すなわち春によって始まる新しい一年の始まりでもある。四はここで靈魂の輪廻転生、死と生誕のつながりを暗示し、そこでは魂は幾度も繰り返し肉体を授かる。春は幼年、夏は青年、秋は壮年、冬は老年と人の生涯の四つの相にも対応する数字である。¹⁰¹

さらには、老婆と彼女に仕えた四匹の犬に、狩人に扮して、*misericordia* (慈善)、*veritas* (真実)、*justitia* (正義)、*pax* (平和) という名の四匹の犬を連れていた大天使 Gabriel の姿も重複して見えてくる。

四匹に近隣の三匹を加え、輪を描いて走る犬の数は七匹であった。七は東西南北の四方角に上下中心の三点を加えた、七つの要素を示すことから、宇宙の秩序を象徴している。¹⁰² 七は一週間を意味し、新月から満月へ、そしてまた新月へと繰り返す周期を持つ天空の月と共に時間と周期を表すことから、七も再生・永遠を象徴する。犬が、その数によって老婆を時間的に、空間的に、永遠の世界へしっかりと位置づける役割を果たしている。

3

老婆は安らかに息を引き取った。自らの生涯を全うした安堵感あるいは達成感があったかもしれない。それまでの彼女の生涯を知る読者にとっては、これは、老婆の現世の苦行からの解放あり、同時に彼女への償いである。犬が彼女を安らぎの世界、永遠の世界へと導く案内人となった。

この老婆の死を町はどのように受け入れたであろうか。見かけない hunter が町に遺体の知らせを持って駆け込んできたのは、夕刻であった。直ちに人々が集まり、現場へ急行する。

一行は、案内役を務める hunter、南北戦争で脚を痛めた恰幅の良い town marshal、町の葬儀屋、そして鍛冶屋など男性だけから成っていた。

No woman had come with the party from town; but one of the men, he was the town blacksmith, took off his overcoat and spread it over her. Then he gathered her into his arms and started off to town, all the others following silently. At that time no one knew who she was.¹⁰³

彼女の亡きがらは、優しく、そっとコートを掛けられて、鍛冶屋の腕に抱かれ、しずしずと町へ向かう。同行の者たちがその後続く。この blacksmith という語は、Vulcan を想起させ、どこか力のある逞しい男性を思わせる。月の光の下、黙したまま、しずしずと進む行列には、一人の英雄の死を悼む葬列にも似た荘重さが感じられる。彼女以外はすべてが男性であることは、儀式性を高め、彼女にいったいその神秘的清純さをもたらし、彼女を何か神格へと近づける効果を与えている。町へ着いた遺体は、葬儀屋の中に運ばれ、戸が閉められてしまう。

ここで、別の習作“The Death in the Forest”の描写と比べて見よう。

It was December and snowing when Mrs. Ike Marvin — we knew her as Ma Marvin —

died in the little hollow in the center of Grimes' woods, about two miles south of our Ohio town.⁰⁴

これは物語の書き出しの部分であるが、冒頭から、老婆の名前も遺体の発見場所も判明している。神秘性がない。因みに、この Grimes は老婆の名前ではなく、森の名前である。ここでは、老婆は Mrs Ike Marvin 又は Ma Marvin の名前で登場している。

Two young fellows, the Passley boys, who had been out hunting rabbits brought the news into town. They had stumbled upon the poor woman's body, all covered with snow as they tramped through Grimes' woods, or perhaps their dog had found it.⁰⁵

発見者は顔馴染みの二人の若者兄弟で、遺体に接した時の緊張や畏怖の念も薄く、日常の延長を感じさせる。本作品の場合、見知らぬ hunter が一人だけで、遺体に直面し、手も触れず、おそれながら町へ知らせに駆けつける。その張りつめた空気のようなものがこの習作にはない。

And we all closed up the stores and went out to Grimes' Woods. Even women who had no babies to look after went.⁰⁶

現場へ向かう人は男女が入り混じり、三々五々、野次馬が群がるような印象を与える。the party という表現もない。女性を含まない男性だけの集団の持つ特異な厳粛さも欠く。

There was the white, half frozen little old figure, pitched a little forward (she had stopped to rest, sitting on the ground by a little piles of stones) and ...⁰⁷

遺体も、年老いたままの姿であって、少女への変身もみられない。石の上で前にのめる様な姿勢で発見される。Mrs Grimes のように、十字架を忍ばせる様な立木を背にした凜としたところがない。犬たちも 'a pack of the big ugly dogs'⁰⁸ と故意に醜い犬にされ、先に見た整然さや秩序を含み持つ頭数も明示されていたい。老婆を永遠の世界へ送り届ける神聖な任務を担う犬ではない。とりわけ決定的な相違は、遺体を家まで送り届ける場面である。

We all stood about for a long time before some men, directed by Ben Lewis, got a barn door from a nearby barn, put the dead woman's body upon it and tramped off to the Marvin place, two more miles away.

It was said later about town that they found but two of the Marvin men at home and they both drunk and quarreling.⁰⁹

遺体はそのまま戸板にのせて運ばれる。上着を掛けられ、鍛冶屋の両腕に抱かれることもない。ここでは、公務を代表する town marshal も葬儀屋も登場しない。Ben Lewis という偶々都会から戻ってきていた若い新聞記者が采配をとる。この男の自慢話が、この老婆の死も単なる田舎町の事件、ニュースとして扱われる印象を与える。最終的に、遺体が行き着いたのは葬儀場ではなく、身内の酒乱の場と化した老婆の家である。

他方、'Death in the Woods' では、身元が判明するのは翌日になってからである。それまでには、謎に包まれた女性への哀悼と厳粛な儀式は終わっている。既に、老婆に対する人々の認識も変わってしまっている。この女性が、自分たちが無視してきた、あの哀れな老婆であるとは誰一人知らなかったことになっている。

彼女の死をめぐる夫と息子にかけられた嫌疑も晴れるが、町の人々の冷たい視線に、彼らはどこへともなく立ち去って行ってしまった。なるほど、確かに彼らは老婆を虐待した。しかし、町の人々

に二人を非難する資格があるであろうか。彼らを非難出来るほどに、老婆にやさしかったであろうか。あの最後の雪の日、肉屋から老婆への呼びかけも、悪天候でたまたま客もないし、おそらく退屈であったせいであろう。しかも、長い年月の間で、あの一回限りではなかったか。Mary Ann Ferguson の言う様に、夫と息子は町の人たちからの一種の scapegoat にされたのである。⁽²⁰⁾

4

あの肉屋での場面を振り返ってみたい。

The butcher said something about her husband and her son, swore at them, and the old woman stared at him, a look of mild surprise in her eyes as he talked. He said that if either the husband or the son were going to get any of the liver or the heavy bones with scraps of meat hanging to them that he had put into the grain bag, he'd see him starve first. ⁽²¹⁾

肉屋は、評判の良くない Jake 父子のことはよく知っていたことが窺える。老婆の表情には、他人から初めて個人的に親しく話しかけられた事自体への驚きと、同時に、肉屋の言葉に対する驚きとがある。続いてすぐに彼女の心の内が示される。

Starve, eh? Well, things had to be fed. Men had to be fed, and the horses that weren't any good but maybe could be traded off, and the poor thin cow that hadn't given any milk for three months. Horses, cows, pigs, dogs, men. ⁽²²⁾

作品の中で、唯一つ老婆の考えが述べられているところである。ここに彼女の生に対する基本的な考え方が現れている。たとえ何の役に立たなくても、生あるものはすべて生きなくてはならない。養われなくてはならないのである。

Erich Fromm は *The Art of Loving* の中で、母性原理と父性原理 (the motherly and fatherly principle) にふれて、両者の違いを次のように説明している。

Motherly love by its nature is unconditional. Mother loves the newborn infant because it is her child, not because the child has any specific expectation....Unconditional love corresponds to one of the deepest longings, not only of the child, but of every human being; on the otherhand, to be loved because of one's merit, because one deserves it, always leaves doubt;... ⁽²³⁾

老婆の愛は、この無条件的なものであり、Erich Fromm の言う母性原理に基づくものと言えよう。それとは対照的に、価値のない者は死んでも当然と言うのが、肉屋の意見である。彼の方は、Fromm の言う父性原理に基づいている。老婆は、'Starve, eh?' 「飢え死にだって? とんでもない」と言っている。およそ生あるものは全て養われなくてはならない。役に立つたためは問はないのである。万物へ別け隔てなく注がれるこの母性的慈しみは、まさしく母性原理そのものであり、老婆はその体現者である。因みに、河合隼雄氏も、『母性社会日本の病理』の中で、母性原理は「包含する」機能によって示され、父性原理は「切断する」機能にその特性を示すと述べている。その上で氏は、西洋の文化は強烈な、母の否定の上になりたっているとして、「アメリカでは今まであまりにも切り棄ててきた母性をいかに取り戻すかという点で大きい問題をもっている」⁽²⁴⁾と指摘している。Anderson が老婆を通して体現している思想は、まさに今日の問題である。

ここで、Anderson がこれまで描いてきた、同じように不幸な人物の例として、Louise Bentley を取り上げ、老婆の場合と比較してみよう。

Louise は *Winesburg, Ohio* の "Godliness" に登場する女性である。彼女は、父の愛に恵まれず、早く母を失い、John Hardy と互いの誤解による結婚をしてしまう。John も夫としての愛情を示してはくれるが、積み重なる不満に、夫にナイフで斬りかかり、家に火を放ち、世間からは薬物や飲酒の常習者の評判をたてられる。また、時には町中を馬車で暴走して、人々を恐れさせる。いわば自らの不幸な巡り合わせに、全身で反抗している。

"Death in the Woods" の老婆も、両親の愛にも、少女時代の夢にも、そして結婚生活にも恵まれなかった。事実、彼女の生涯は苦境の連続であった。むしろ、Louise を遙かに凌ぐ不幸な境遇にあった。老婆は、自分を抑え、寡黙であり己を語らないから、彼女の苦悩する姿は表面化されていない。彼女の苦難を具体的に感じとるには、この作品の習作の中で描かれた姿を見るのが早い。

習作の一つ "Paris Notebook" では、老婆は Mother Winters の名で登場する。そこでは、歳をとった今もなお、奉公していた少女時代の夢に悩まされる。夢の中では、動物の飼育に腕もちぎれるほどの苦しみ、或いは死と引き替えに救いを求める自分の姿に夢から目覚めたりする。⁽²⁵⁾ 別の習作 "Father Abraham: Lincoln Fragment" では、少女は奉公先のはげしい労働に夜も足が痛んで眠れない。或いは思春期の性の目覚めに伴う微妙な心の乱れ、⁽²⁶⁾ 又、彼女に浮気心をおこした農夫から追われる恐怖、或いは逆に農夫を懲役へと追い込んでしまう事件⁽²⁷⁾ など、生々しい姿が赤裸々に描かれている。

完成された作品 "Death in the Woods" の老婆には、Louise の例で見た苦しみや悩みの姿は見られない。老婆は Louise と本質的に異なる。

繰り返しになるが、老婆は早くから両親に捨てられ、奉公先では労働と孤独な少女時代を過ごし、セクハラに悩まされ、結婚生活の中で、夫から Louise ほどの愛など望むべくもなかった。しかも、彼女は反抗したり、不満や鬱積したものを暴発させる訳でもない。彼女は生涯をあるがままに生き、己の身に降りかかる苦難を自分で受け止めている。他者に頼ることも、他者を犠牲にすることもない。すべてを甘んじて受け入れ、その一方で、むしろ他者に自ら施せるものを精一杯与えてきた。彼女は現代の聖人とでも言うべきであろう。彼女のそうした一面を作者はどの様に描いているのだろうか。

次の文は、老婆が最後の買い物を終えて、家路への近道を取ろうとしている場面である。

She might have gone around by the road, but it was a mile farther that way. She was afraid she couldn't make it. And then, besides, the stock had to be fed. ⁽²⁸⁾

彼女は、道の選択を一瞬ためらっている。近道は単に距離が一マイル短いだけではない。無事辿り着けないかもしれない不安がある。なぜ、結果的に彼女の命取りになる道を、選択したのであるうか。家では、家畜たちが腹をすかして、彼女の帰りを待っていた。又、夫と息子も馬喰の仕事からもどっているかもしれない。彼らの食事の準備もしなくてはならなかった。

With the pack on her back she went painfully along across an open field, wading in the deep snow, and got into the woods.

There was a path, but it was hard to follow. Just beyond the top of the hill, where the woods was thickest, there was a small clearing. Had someone once thought of building a house there? The clearing was as large as a building lot in town, large enough for a house and a garden. ⁽²⁹⁾

この the pack には、動物たちや夫たちに供する、つまり他者の為の品々が入っている。老いた身体にはかなりの重荷であった。There was a path, but it was hard to follow. とは、勿論、文字通り正規の道に比べ、歩きにくい事をのべている。しかし同時に、この近道は、並の人の歩む道（＝人生）を歩むことを許されず、他者の為に人目につかず困難な裏道（＝日の当たらぬ人生）を歩まなくてはならなかった彼女の人生を象徴している。

ところで、Anderson は作品の中で聖書的な symbols を巧みに用いる。例えば、Winesburg, Ohio の "Strength of God" では、少年の足の踵にアダムとイヴの誘惑の関係を、また、開かれた聖書にキリスト教の教えそのものを、象徴させて、巧みな表現効果を出している。⁽³⁰⁾

重い荷物を背負い、深い雪の中を苦しみながら山上に向かって歩む老婆に、生けるキリストの姿を重ねるのは唐突であろうか。この老婆の不遇な生涯も、その責任を彼女自身に帰せることは出来ない。彼女には関わりのない世間の不条理によるものである。それは彼女が背負わされた宿命であった。やや大げさだが、幼い彼女を捨てた父母やドイツ人夫婦や夫とふしだらな息子等に代表される、放蕩、物欲、利己心など、人類の罪を、一人背負って、ゴルゴタの丘ならぬ、森の山頂へ向かうキリストの姿である。老婆は一本の木に背中の荷をもたせたまま息を引き取った。ここでは、木は十字架を想起させる。先に見たように、The Death in the Forest 版では、老婆は山頂でなく窪地で、また木のもとではなくいくつかの石のそばの地面に腰お降ろしている。ここでも、この状況の改変に、作者の、象徴的な効果に託した隠された意図を窺うことが出来る。家屋一軒分の空き地の件も、彼女に捧げられた眼に見えぬ宮へと読者の想像をいざなう。

語り手が繰り返し言っているように、彼女は決して特別の人ではない。どこの田舎町でも見かける普通の老婆である。彼女は、日常的なごく平凡な人の中に発見されるキリストである。

6

作品集 *Death in the Woods and Other Stories* に収録されている作品は多様である。作品の舞台も、山岳地帯、都会、ヨーロッパと様々で、扱われるテーマも多く、明確な一つのものに集約するのは難しい。

この作品集の最後にあって、同じく、生と死の問題を扱っている作品、"Brother Death" を概観し、"Death in the Woods" との関連を見たい。

物語は、庭にそびえる二本の樫の木の伐採を巡って、父と母の意見の対立から始まる。貧しい境遇から勤勉によって富を築き、落ちぶれたかつて名門の屋敷を買い取り、その娘を妻とした John Grey と、今は彼の妻となっているその名門の娘 Louise との対立である。彼女は、実家の過去の繁栄の象徴であるこの木を守りたい。長男 Don は母の側に立ち、父に反抗して家出までするが、結局、専制的な父の権力に屈してしまう。これが、自分を捨てて、すべては父の意のままに生きる事の宣誓となってしまう。幼少より抜群の才能を発揮し、健康にも恵まれ、模範青年として地域社会からも高い評価を受けた18歳のこの長兄に対し、11歳になる弟の Ted は心臓を病み、絶えず死の危

険にあって、馬に乗ることも、木に登ることも、走ることも、子供の好むすべての遊びを禁じられている。しかし、14歳の姉 Mary だけは、Ted の理解者として常に彼を支える。ある日、彼女は、Ted と雨の中で一緒にずぶぬれになって遊び回り、彼の念願を叶えさせる。これを見た母 Louise は恐怖と不安のこもった声で、Ted を叱る。‘Oh, Ted, you mustn’t. You mustn’t run hard, climb trees, ride horses. The least shock to you may do it.’⁽³¹⁾ これは母が Ted に対していつも口にしていた言葉であった。

You should have more sense, Mother,...You mustn’t do it any more. Don’t you ever do it again.

If he is to have but a few years of life, they shall not spoil what he is to have. Why should they make him die, over and over, day after day?

Life, what is it worth? Is death the most terrible thing?⁽³²⁾

以上が、弟をかばう Mary が母に対して、子供ながら、漠然と考えていたことである。

50歳の母と14歳の娘のこの対比は、いわば、大人の子供と子供の大人の対比である。この外見と内実の違いは、そのまま、Don と Ted の違いに移行される。己を殺してひたすら父の意に添って、いわば死んだ状態で生きている強健な Don の生き方と、死を目前にしながらも、一日一日を自分の意に添って存分に生き抜く病弱な Ted の充実した人生とは好対照である。生きながらの死と死にながらの生である。

They (= Mary and Ted) continued doing things that had been forbidden Ted to do, but no one protested, and, a year or two later, when he died, he died during the night in his bed.⁽³³⁾

結局、Ted の生涯を悔いないものにしたのは、Mary の力であった。母や他の家族たちは、Ted の表面上の命のみを考え、Ted の本当の幸せは何であるか、など考えない。ひょとしたら、彼らは Ted の死のもたらす己の悲しみを回避することを考えていたのかも知れない。Mary には弟に対する真の愛情と知恵があった。

Mary は、後年、Ted と共にとらわれのない自由で幸せな日々を過ごせた理由を次のように説明している。

It was, she finally thought, because having to die his kind of death, he never had to make the surrender his brother had made — to be sure of possessions, success, his time to command — would never have to face the more subtle and terrible death that had come to his older brother.⁽³⁴⁾

Mary は二つの生と死の姿を見た。与えられた生涯を、そのまま、あるがままに受け入れた Ted の生と死は、“Death in the Woods” の老婆の生と死に相通じるところがある。

かって、Ferguson は、この老婆を、‘She is a symbol, not a real human being.’⁽³⁵⁾ と評した。成る程、彼女はなんの自己主張もせず、その内面もほとんど明かすことなく生涯を閉じている。生々しい人間らしさにやや欠ける点は指摘の通りである。“Brother Death” の Mary にはその批判に耐えるものがある。他者の為に己を貫き通す意志の強さと、権威にも敢然と立ち向かって行く勇気がある。この Mary の中に、さらに自らの意思を持った人間として、生き返った老婆の姿が見える。彼女こそ、愛と知を兼ね備え、さらに自らの意志を持って生き返った老婆の再生の姿である。しっ

かりと肉付けされ成長した女性像を描いた "Brother Death" を作品集の最後に持ってきたのも頷ける。Kim Townsendも作品集における両作品の位置づけを、'Anderson's Book *Death in the Woods and Other Stories* began with the title story, and "Brother Death" was its complement, the collection's climax'³⁶⁾と相互補完的に捉えている。

おわりに

Anderson が描く母性愛や人間愛を抱いた人物は、この老婆や Mary に限らない。*The Triumph of the Egg* (1921) の "The Egg" に登場する mother なども、夫や子供の将来の幸せを考えて、夫に新しい事業を決意させ、献身的に協力する。次々と失敗する夫を優しく受け入れる。しかし、やはり彼女は老婆や Mary とは異なる。そもそも、夫は作男としての素朴で牧歌的な生活にすっかり満足していた。そこへアメリカ的な成功への夢や野心を持ち込んだのは mother であった。彼女が、もともと素朴な農場労働者の生活に満足していた father を養鶏業へ、更にレストラン経営へ向かわせた。純粹に夫や息子の幸せを願うものではなかった。物欲や社会的名誉への野心が先にあった。勿論、誰もが成功を夢見ていた当時の時代背景は無視できないが、彼女の恣意が、満ち足りた生活に不満の種を蒔き、夫には人生の挫折を、息子には人生の暗さをもたらした。そして、生来陽気な夫を、奇形の鶏をアルコール漬けして大切に、見せびらかすグロテスクな人物にしてしまった。

Dark Laughter のヒロイン、Aline は、夫 Fred との不毛な結婚生活へ終止符を打って、庭師 Bruce と駆け落ちをする。Fred も彼女と同様に時代と戦争の犠牲者である。Aline の場合、自らの幸せの為には平然と夫を見捨てる。彼女は Bruce との間に互いの人生の良き伴侶を見いだした。確かに、妻にも都会生活にも失望し精神的にも力を失っていた Bruce に、彼女は生きる情熱を与えた。しかし彼女は夫の Fred にはどうであったか。Aline が、戦時のそして戦後の時代と運命の犠牲者であったとするならば、Fred も同様ではないか。母を追う赤子のように彼女を求める Fred を捨てて、家を出ていく Alice には老婆にみる無償の愛の精神はない。

これまで、Anderson は *Winesburg, Ohio* をはじめ、*Windy Mcpherson's Son* (1916), *Poor White* (1920), *Horses and Men* (1923) など多くの作品で、現代の産業主義や商業主義に犯された社会の中で苦しみ悶えるグロテスクな人間像を描いてきた。そんな彼にとって、名もない田舎の老婆の中に、失いかけた人間の美しさ、すばらしさ、可能性を見い出したことは、Anderson 自身にとって大きな救いとなる。彼はシカゴやニューヨークの生活に疲れ、大都市を避け、ゆったりとした生活のリズムと感性豊かな生活を求めて南部へと下るが、ニューオーリンズにも馴染めなくなる。そして、最後に、ヴァージニアの山間の地に終生の居を定める。やがて、その地で地方新聞を発行したり、地域の人々の生活の中にとけ込み、そこに自己の文学を創り出していった。Anderson にとって、この作品並びに作品集は大変意義深いものである。これまでの作品に見られた、己の人生のためにいわば悶え血みどろの戦いをしていた人間たちの姿はほとんど姿を消し行く。"Death in the Wood" は、"Brother Death" 並びに *Death in the Woods and Other Stories* の中の他の作品をはじめ、"The Corn Planting" (1934) など、ある種の静謐な魅力を持った後期の優れた作品群を生み出す出発点となった。Burton Emmett に言った如く another Sherwood Anderson として誕生したのである。

注

- (1). 本論で、言及するもののみを示す。
William V. Miller (ed.), "The Death in the Forest" in *Tar: A Midwest Childhood* (Cleveland : The Press of Case Western Reserve University, 1969)
Michael Fanning (ed.), *France and Sherwood Anderson: Paris Notebook, 1921* (Baton Rouge : Louisiana State University Press, 1976)
"Father Abraham : A Lincoln Fragment" in *The Sherwood Anderson Reader* ed. with an Introduction by Paul Rosenfeld (Boston : Houghton Mifflin Company, 1947)
- (2). Charles E. Modlin (ed.), *Sherwood Anderson Selected Letters* (Knoxville : The University of Tennessee Press, 1984) pp.95-6
- (3). Sherwood Anderson , "Death in the Woods" in *Death in the woods and Other Stories* (New York : Liveright Inc. Publishers, 1933), p.6
- (4). "Father Abraham : A Lincoln Fragment" in *The Sherwood Anderson Reader*, pp.587-88
- (5). "Death in the Woods", pp.9-10
- (6). *ibid.*, p.15
- (7). *ibid.*, p.18
- (8). J. E. Cirlot, *A Dictionary of Symbols* (London:Routledge and Kegan Paul, 1967), p.80
- (9). "Death in the Woods", p.14
- (10). J. E. Cirlot, *op. cit.*, p.222
- (11). 芹沢 哲「ピュタゴラスにおける数の思想について」(名著刊行会、『ユング研究』6) 1993年), pp.134-4
- (12). J. E. Cirlot, *op. cit.*, p.223
- (13). "Death in the Woods", p.21
- (14). "The Death in the Forest" in *Tar: A Midwest Childhood*, p.232
- (15). *ibid.*, pp.233-4.
- (16). *ibid.*, p.234
- (17). *ibid.*, p.235
- (18). *ibid.*, p.235
- (19). *ibid.*, p.235
- (20). Mary Anne Ferguson, "Death in the Woods : Toward a New Realism" in *Critical Essays on Sherwood Anderson* ed. David. D. Anderson (Boston: G.K.Hall & Company, 1981), p.223
- (21). "Death in the Woods", p.11
- (22). *ibid.*, pp.11-12
- (23). Erich Fromm, *The Art of Loving* (New York : Harper and Row Publishers, 1989), p.38
- (24). 河合隼雄『母性社会日本の病理』(東京:中央公論社, 1976), p.30
- (25). *France and Sherwood Anderson: Paris Notebook, 1921*, pp.62-64
- (26). "Father Abraham : A Lincoln Fragment" in *The Sherwood Anderson Reader*, pp.583-84
- (27). *ibid.*, p.578
- (28). "Death in the Woods", p.12
- (29). *ibid.*, pp.13-14
- (30). Roger Asselineau, *The Transcendentalist Constant in American Literature* (New York : New York University Press, 1980), pp.131-32
- (31). Sherwood Anderson , "Brother Death" in *Death in the woods and Other Stories* (New York : Liveright Inc. Publishers, 1933), p.279
- (32). *ibid.*, pp.278-80
- (33). *ibid.*, p.297
- (34). *ibid.*, p.298
- (35). Mary Anne Ferguson, *Images of Women in Literature* (Boston : Houghton Mifflin Company, 1986), p.22
- (36). Kim Townsend, *Sherwood Anderson* (Boston : Houghton Mifflin Company, 1987), p.282